

創造性のある 教師になるために

片岡 靈 恵

幼児の中に創造性の芽ばえを発見し、それを育てて行くためには、教師自身の創造性が大切である……と、62巻11月号に書かせていただいた。私たち日本人が、創造性の教育について外国人から学ぶことが多いということも事実のようである。

しかし、私たちは、今、日本の土の上で、日本の子どもたちを育てる責任をになっているのである。他から学ぶと同時に、自分の手で持つものを見直すことも必要である。現在のありのままの状態から、新しいものを見出すことも多いし、また、古いものが、急に新鮮な意味をもってよみがえって来ることもある。このようなことに気づく鋭い感受性と、積極的にそれを

求めようとする態度が、すでに、創造性の誕生を語っていると思う。

ここで、創造性のある保育者になりたいと願う私たちの生活の場を二つに大別してみたい。一は、保育の現場であり、一は、一人の人間としての成長の場である。

一、保育という仕事の中で

日々の保育のいとなみの中で、教師の創造性がものを言う場面はいくらでもある。殊に、幼児の自由な活動や遊びの中で、

私たちは、一日に何度、驚異の眼をみはるか知れない。多くの場合、そこには、こどもたちの創造性を発見するのであるが、その発見が、私たちの保育活動を創造的に深めてくれる機会となることが多い。二、三の例について考えてみよう。

○ 運動会

この秋も、運動会が盛んに行なわれた。学校や幼稚園、保育所はもちろん、この頃は、町会や会社まで運動会をする。その内容、方法にはいろいろあるが、秋晴れの一日、こどももおとなも、戸外の広々したところで、思いきり運動して楽しむということには変りない。このすばらしいアイデアは、誰が最初に考え出したのであろうか。そして、このような行事に、教育的意義を見出して、学校教育のカリキュラムに採り入れたのは誰だろうか。私は、外国にこのような行事があることを知らない。一度、中国人の小学校教師に聞いてみたが、「自分がこどもの頃、やった覚えがあるが……」というぼんやりした答えだった。いずれにしても、日本のような形式で、こんなに賑やかに行なわれている国はないようである。こうしてみると、運動会は、私たち日本人の創造性のうみ出した、すばらしい教育的プログラムかもしれない。

しかし、元来、こんなに創造的な運動会がともすれば、既製品の内容的、お祭りさわぎに終ってはいはしないだろうか？ 反省すべき点が多い。運動会といえば必ず、万国旗をかざり、ラインをひいて、お客を招待したり、賞をあげたりしなければ……という既成概念にとらわれてはいないだろうか？ プログラムにしても、徒競争に綱引、まり入れ、リレーなどは不可欠であると思いきんではないだろうか？ そして、こどもの興味、能力の状態にふさわしい種目よりも、おとなを喜ばせることに重点をおきがちではないだろうか？ 見て美しいマスキームやダンスは、往々にして、しているこどもたちには、迷惑以外の何物でもないことが多いのである。

○ 紙芝居

テレビの普及は、紙芝居を街頭から追放してしまったという。実際に、紙芝居は、幼稚園や、保育園でだけしか見られないようになりつつある。けれども、そのような現在、こどもたちは依然として紙芝居がすきである。他所で見られなくなっただけで稀少価値が出てきたからとばかり考えられない。先生たちも、相変らず、その安直さを利用して、業者はまたその需要に応じて発行出版をつづける。

しかし、この紙芝居もまた、外国では見られないユニークな教材である。こんなに長いこと子どもたちに愛されるには、それだけの優秀さと魅力があるのではないか。第一に、絵本を見せて読んでやるのとは違った演劇的な興味が湧く。簡単なトリックで動く部分をつくったり、一枚々々の抜き方に変化をつけることもできる。演者に、自由に表現演出をする機会が豊富であるなど。

保育者の手でよりよい紙芝居をつくるのは望ましいが、技術的にむづかしい。せめてその用い方に、もっと創意工夫がこころみられるべきである。そうすれば、この素朴な教材は、いつまでも、子どもたちの眼を輝やかせ、その心を豊かにするであろう。

○ 打 楽 器

音とリズムの世界も無限の興味にみちている。リズムバンドは、タンブリンとトライアングルがなければできないだろうか？ また、それだけがあれば、リズムバンドができるのだろうか？ そうではない。

リズムの楽しさを味わうには、打楽器一つあれば上等、なければ、手を叩き、床をふみならせばよいのであって、必ずず

アノに合わせなければリズム感が養われないということはないのである。いくつかの打楽器だけで創り出すモダンジャズのダイナミックなリズム。心をうきうきさせる祭りの太鼓のひびき。単調のようで、私たちの心をゆきぶる原始民族の踊りなどは、私たちに何を語っているだろうか。

「音楽がかえって、身体のリズミカルな動きを制限することがある。」という説を読んだ時私は、どうしても納得できなかったが、先頃、保育実習の場でこのことを裏書きするような場面に出会った。ある幼稚園で実習生がリズム指導をしていた時のことである。彼女が、四才児二十五、六名に「みんな小鳥になってとびましょ」と言った時、一人ひとり実際にうれしそうにとびまわったのだが、次に「今度は、ピアノに合わせてとんでごらん」と言う一声で、子どもたちの楽しそうな表情が消えてしまった。そればかりか、ピアノのテンポがおそすぎた為か、すっかり興味が失われてしまったのである。このような現実からも、私たちは、動きのリズムと音楽との関係について、従来のやり方にとらわれないで探求してやる必要があるのではないだろうか。

○ 映画「絵をかくこどもたち」

「教室のこともたち」に次いで、羽仁進氏がこの映画をつくられたのは、十年位前のことではなかったかと思う。その映画を、昨年、コロンビア大学教育学部で、五回も見ようとは想像もしなかった。絵画製作のクラスで、幼児教育プログラムのコースで、心理学教室で、幼児音楽の演習で、そして最後には幼稚園、小学一年生教師の協議会で、この映画が用いられた。もちろん、いずれも、討議の資料としてである。批評や評価は、その時々顔ぶれで、変化に富んでいたが、中でも印象深かった共通の批評は次のようである。すなわち、

「教育における創造性は、環境や設備、生徒の素質などのよいわるいに関係ない。教師自身の創造性が、創造的な指導をうみ出し、創造的なことをつくるのだ。」

周知のように、この映画が製作されたのは終戦後間もない頃で、貧しい東京の下町の公立小学校が舞台である。家庭生活も苦しいし教育のための設備も教材もとのわない状況で、団体生活をはじめたばかりの一年生五十人ほどの組を担当する若い男の先生は、毎日のコタコタした生活の中で、いろいろのこともたちにぶつかる。こともたちはまた、一人ひとり、先生を、友たちを、そして学級集団というものを探り求めてゆく過程にある。一度もクレヨンをもったことのない子が、すばらしい絵

をかくようになり、そして明るい表情、活潑な行動をするようになる。家庭に問題のある子が、その絵で、それを訴え、交友関係がうまくいかない子が、粘土で、欲求不満をみたそうとしている。

このような映画をみて、人々は皆、日本の教育は、何と創造的なあり方をしているのだろうと目をみはってくれたものである。そして、私たち日本人は、何か、くすぐったい思いをしたことを覚えている。

たしかに、私たち日本人は芸術の領域ですぐれた創造性を持ち、そして、それを育てるすべを知っているようだ。乏しい素材の中に、かえって純粹の美を発見する特別な能力をもっている。

しかし、ここで、私たちは手ばなしで喜ぶわけにはいかないのではないか。何故ならば、少なくとも現在の幼児教育の領域では、教師の創造性が盛んに生きて働いているとは思えないからである。「むすんで開いて」をくりかえして、子どもを静かにさせて、あり合わせの紙芝居を見せ、おきまりの色紙細工をさせて、「さよなら」の歌をうたうというような毎日から

は、創造のよろこびはなかなか生まれないと思う。

二、一人の人間として

私たちは、保育者または教師であると同時に一人の人間である。前述のように、教師としての創造性は、教育という仕事の中で探索され、把握され成長してゆく。このことは、一人の人間が、創造的な人格として成長すること、どのようにかかわってくるだろうか。

教育という仕事の中に創造性を探求する態度は、自分自身と、その周囲の世界との関連の中でも、同様な生活の姿勢をつくるところと思う。創造性のある教師は、創造的な生活と生涯を生きる人間である。毎日の、具体的な生きた生活に、力いっぱいぶつかりながら、その中で、いつも詩を発見し、よろこびを歌う人間になりたいと思う。

望ましい教師のパーソナリティーとか、理想的教師像とかが盛んに論議されているが、このことは、理論としては理解されても、何かいつも、第二義的なものとして考えられているように思われてならない。これからの保育者には、もっと、この点

が強調されてよいことと私は考える。

昨年から保育の現場をはなれて、保育者養成という新しい任務を与えられている私は、若い人たちが創造性のある保育者になるために、大きな責任を痛感する。このような保育者を育てるには、必然的に、先輩の保育者と養成機関の教師の創造性が大いに問われなければならないからである。

まず、先輩である私たちが、現在ありのままの人間としての自分を見つめ、教師としてのあり方を反省し、創造的な教育をすることができるよう努力しなければならない。このような先輩の人となりと生活態度を、終始学生は観察している。そして保育者の生活がいきいきした魅力にとんだものとして、若い人たちの眼に映る時に、創造性のある未来の保育者が誕生することであろう。

創造性のある教師になるための鍵は、この辺にあるのではないだろうか。

(平安女学院短期大学)